

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 外国語活動 第3号

— 小学校・特別支援学校対象 —

平成24年4月発行

### 外国語活動における学習評価の工夫 — 評価規準の設定による指導と評価の一体化 —

平成23年度から、小学校で外国語活動が全面実施され、外国語を通じて、コミュニケーション能力の素地の育成を目指す指導が行われている。外国語活動の評価については、設置者において、学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って評価の観点を設定し、学級担任が児童の活動の様子等について文章の記述による評価を行うこととされている。

本稿では、外国語活動における指導と評価が効果的に行われるよう、単元や各時間の目標に照らした評価規準の設定の基本的な考え方を実践例を踏まえながら述べる。

#### 1 外国語活動における評価の観点と趣旨

外国語活動においては、児童が慣れ親しんだ外国語を用いて自分の気持ちや考えを伝え合う活動が重視されている。したがって、児童にとって身近な題材を取り上げ、使用する外国語に慣れ親しませる中で、体験的に言語の豊かさやものの考え方の違い等に気付かせたり、更には相手のことを意識して伝え方を工夫させたりなどしてコミュニケーションを図る楽しさを感じさせることが必要である。

このような学習においては、児童の活

動状況が、多面的であるため、教科と同じく評価の観点を定め、児童の様子を見取ることが必要である。表1は、外国語活動の目標に基づいた評価の観点とその趣旨等である。児童が外国語に慣れ親しんでいる状況や活動への取組状況、更に活動を通じた体験的な理解の状況の評価するには、それぞれの観点を適切に把握する必要がある。

表1 外国語活動の評価の観点及び趣旨等

観点	趣旨	見取りの視点(例)
への関心・意欲・態度	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動への関わりの様子</li> <li>様々な表現手法の工夫している様子</li> <li>相手との関わりを大切にしている様子</li> </ul>
親しみ	外国語を用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国語を用いて表現している様子</li> <li>外国語を通して理解している様子</li> </ul>
気付き	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言語の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語と外国語の相違点等に気付いている様子</li> <li>日常生活や学校生活等について、日本と外国の相違点等に気付いている様子</li> </ul>

※ 以下文中では、「関心・意欲・態度」(コ)、「慣れ親しみ」(慣)、「気付き」(気)と記載

### (1) 「関心・意欲・態度」の観点

相手を意識しながらコミュニケーションを図っているかを見取る観点である。自分の気持ちや思いを、外国語または言葉によらない手段で伝えようとしているかを見取ることになる。また、相手が伝えていることを理解しようとする積極的な態度も見取る視点となる。

### (2) 「慣れ親しみ」の観点

活動の中で、授業で取り扱った外国語を聞いたり話したりしているか、その行動で見取る観点である。外国語を通じてコミュニケーションを図る活動において、外国語に十分慣れて相手に話しているか、あるいは、一部でもよいから聞いて相手の言うことを理解しているかなどを見取る。注意しなければならないのは、児童が、数多くの単語や表現を覚え、外国語の規則に沿って正しく発話しているかという視点ではなく、コミュニケーションを図る上で、単語や表現を場面に応じてどのように使っているかという視点である。

### (3) 「気付き」の観点

単元で使用する外国語と日本語との比較などを通して発見した言語の共通性や相違性から、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方等に気付いている様子を見取る観点である。この観点には、「日本語と外国語との共通点、相違点に気付いているか」という側面と、「使用する外国語の表現や単語の文化的背景に気付いているか」という側面の二つがある。例えば、外来語と

英語の音声や使い方の違いへの気付きや、挨拶・自己紹介等に適するジェスチャー、必要なマナー、発表の工夫等が具体的な要素として考えられる。

## 2 評価規準の設定による指導と評価

外国語活動の評価においては、「できる」「できない」という視点で数値化するのではなく、単元等の目標に沿って、児童一人一人の活動状況を見取る評価規準を設定することが大切である（表2）。

表2 評価規準の設定と評価の流れ

①	単元の目標に照らした評価規準の設定 ・ 単元終末時の児童の姿の想定
②	単元の「指導と評価の計画」の作成 ・ 各時間の観点の絞り込みと評価規準の設定
③	授業（評価の対象となる活動）の実施 ・ 指導すべきポイントを明確にした指導
④	評価規準に照らした評価 ・ 評価規準に基づく行動観察等
⑤	評価に基づく指導 ・ 良かった点等を挙げて確認

例えば、単元の終了時に求める児童の姿を「慣れ親しんだ外国語を使って、好きなものを伝え合ったり、聞き手を意識しながら自己紹介したりしている。」と想定した場合、評価規準は表1に示した各観点の趣旨に沿って、次のように設定できる。

評価規準（例）	
コ	自分の好きなものを含めて友達と積極的に自己紹介している。
慣	好きなものを友達に尋ねたり、自分の好きなものを英語で言ったりしている。
気	外来語と英語の音声の違いに気付いている。

設定された評価規準は、児童の具体的な行動と結び付けておくことが必要である。このように想定しておくことは、評価だけでなく、授業で指導すべきポイント

トを明確にする上でも大切なことである。

例えば、「関心・意欲・態度」の評価規準として「積極的に自己紹介している」と設定した場合は、「積極的」を「ジェスチャー、アイ・コンタクトなどの言語によらないコミュニケーション手段の活用」などと捉えておくことが必要である。これにより、授業において、「英語で伝えられないとき、どうしたらよいのかな。」といった問い掛け等で、「積極的な態度」を意識して指導することにつながる。同様に、「気付き」の観点で「音声の違いに気付いている」については、慣れ親しむ活動を通して、外来語と英語の音声が違うことに気付く姿が考えられる。この場合、「今のゲームで、何か気付いたことがあるかな。」と振り返りの時間を設定し、児童の気付きを促す指導が想定される。

指導と評価の一体化を図るには、評価規準で示された児童の具体的な姿に基づき、「どの活動で評価するか」を指導計画の中に位置付けることが大切である。これにより、各時間の指導と評価が重点化され、授業のねらいを明確にすることができる。表3は、各時間の評価の観点を重点化した例である。

表3 評価の観定の重点化例

時	○ 目標・活動	コ	慣	気
1	○ 外来語と英語の違いに気付く。 ○ 自己紹介の仕方に気付く。 ・カルタ ・キーワードゲーム			○
2	○ 自分の好き嫌いを表現する。 ・チャンツ ・アクションゲーム		○	
3	○ 友だちに好き嫌いを尋ねる。 ・チャンツ ・インタビュー	○		
4	○ 自己紹介をする。 ・スピーチ	○	○	

### 3 外国語活動の評価方法

児童の活動状況を見取るには、評価規準に照らして、どのような方法で評価するかを考えておく必要がある。

#### (1) 観察による評価

「行動観察」や「発表観察」等、コミュニケーションを図る活動を通して、児童の活動の様子を見取る方法である。全ての児童の活動状況を同時に把握することは極めて困難であることから、各時間で重点的に評価する児童を定め、単元全体を通して、計画的に全員を評価する工夫も必要である。また、ワークシートの記述内容等から、活動への取組状況を捉えることもできる。

#### (2) 児童の振り返りによる評価

「自己評価」は、授業の終末時に、児童が自分の活動を振り返るものである。自分の活動状況をマークしたり、活動の中で気付いた外国語の面白さや工夫した点などを記述したりするものなどが考えられる(図1)。時間確保が難しい場合は、振り返りの視点を示し、挙手や感想発表といった方法も活用できる。更に、「相互評価」を行うことにより、互いのよいところに気付かせるとともに、活動時の工夫や意欲的な取組等を教師が把握することもできる。

ふりかえりシート		<買い物を楽しもう> なまえ( )	
ふりかえりのポイント	がんばりぐあい?		
笑顔で話しましたか。			
相手の目をみて話しましたか。			
はっきりとした声で話しましたか。			
注意して聞きましたか。			
今日の学習で、気付いたこと(日本とのちがいを)書きましよう。			
今日の活動で、がんばったこと、工夫したことを書きましよう。			

図1 「振り返りシート」南大隅町立城内小学校の例

#### 4 評価規準を位置付けた指導案例

- (1) 単元 「外来語を知ろう」 (英語ノート1 Lesson 6)  
 (2) 目標

食べ物等の外来語について興味をもち、欲しいものを聞いたり、注文したりする活動を通して、積極的にコミュニケーションを図る。

- (3) 評価規準(観点)

ア	欲しいものを尋ねたり、レストランで注文したりして、積極的にコミュニケーションを図っている。(コ)
イ	基本的な表現“What do you want?” “～, please.”等を使って、欲しいものを尋ねたり、答えたりしている。(慣)
ウ	外来語と、そのもとになる言葉では、音声に違いがあることなどの面白さに気付いている。(気)

- (4) 単元の指導計画(全4時間)

時	主な活動	コ	慣	気	各時間の評価規準	評価方法
1	① 外来語探し ② おはじきゲーム			○	・ 外来語との音声の違いに気付き、英語の音声を意識して発音しようとする。(ウ)	行動観察 自己評価
2	① チャンツで練習 ② レストラン・ゲーム	○	○		・ 積極的にレストランでの会話をしている。(ア) ・ 基本的な表現等を使っている。(イ)	行動観察 自己評価
3	① チャンツで練習 ② フルーツ・パフェづくり		○		・ 身近な外来語や注文の仕方に興味をもって、先生の話や友達の話の聞こえようとする。(イ)	行動観察 自己評価
4	① パフェ当てクイズ ② 友達のパフェの紹介	○	○		・ 積極的にパフェを紹介している。(ア) ・ 身に付けた基本的な表現を使っている。(イ)	行動観察 自己評価

- (5) 本時の実際(2/4) 目標：慣れ親しんだ表現等を使って、積極的にレストランでの会話をしている。

過程	活動内容	○ 教師の働き掛け	【評価】	【評価方法】
ふれる (3分)	1 英語での挨拶をし、歌を歌う。 (Clap your hands.) 2 めあての確認をする	○ 体調や天気等を尋ねる。 ○ めあて及び学習の進め方を提示する。		
つかむ ・ 試す ・ 深める (38分)	3 レストランでの会話を聞く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content;">                     店員) What do you want?                      お客) Pizza please. (メニュー表から選ぶ)                      店員) Pizza. OK. (後略)                 </div> 4 Chantをする。 5 「友達と、レストランでのスキットをしよう」	○ 児童がレストランに必要な表現を考え、これまで学習したことを使って表現を試した後、注文場面のモデルを示す。 ○ 英語ノートデジタル版でチャンツの手本を示す。	○ 児童がレストランに必要な表現を考え、これまで学習したことを使って表現を試した後、注文場面のモデルを示す。 ○ 英語ノートデジタル版でチャンツの手本を示す。	○ 児童がレストランに必要な表現を考え、これまで学習したことを使って表現を試した後、注文場面のモデルを示す。 ○ 英語ノートデジタル版でチャンツの手本を示す。
まとめる (4分)	6 自己評価をする。 7 英語での挨拶をする。	○ 振り返りカードの視点を示す。 ○ 感想交流をし、児童の達成感が高まるようにする。 ○ 終わりの挨拶をする。	【評価】 (ア、イ) 児童が考える友達のよさや、楽しくできたこと等を見取る。【自己評価】	【評価】 (ア、イ) 児童が考える友達のよさや、楽しくできたこと等を見取る。【自己評価】

【徳之島町立神之嶺小学校の実践例を基に作成】

評価は、目標に照らしてその実現状況を把握し、指導の在り方を見直すことにつながる。各学校においても、評価規準の明確な設定などにより、外国語活動における指導と評価の一体化について推進していくことが必要である。

【参考文献】

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説外国語活動編」平成20年8月、東洋館出版社
- 国立教育政策研究所「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料『小学校各教科等』」平成23年3月
- 鹿児島県教育委員会「平成22年度小学校教育課程資料第3集」平成22年8月
- 菅正隆、大牟田市立明治小学校 著『外国語活動評価づくり完全ガイドブック』2010、明治図書

(教科教育研修課)